日本学術会議 心理学・教育学委員会「心理学教育プログラム検討分科会」2009.9.7.資料

高等学校教育における心理学：現状と課題（１）

仁平（にへい）　義明（よしあき）（東北大学大学院文学研究科）nihei@sal.tohoku.ac.jp

日本の高等学校教育の中で心理学にかかわる内容が現在どのように扱われているか、そこにはどのような問題があるかを分析する。さらに、日本学術会議「日本の展望」(心理学)が提唱する初等・中等教育における“心についての科学的な理解”が、高等学校の中で積極的に行われるためには、何が必要かを考察する。

現在の日本の高等学校教育では、教科「公民」のうちの科目「倫理」「現代社会」で、心理学にかかわる内容が少なからず扱われている。しかしその教科書をみていくと、内容は精神分析学あるいはそこから派生した考え方を中心にするなど、心の“科学的な理解”とはほど遠いものであった。また、根拠が明瞭ではない記述、一部の例をあたかも一般的な現象であるかのように思わせかねない記述もあり、さらに現在では明らかな誤りとされる記述が注釈もなく述べられている状況も散見された。

たとえ、高等学校教育に新たに心の科学的な理解を導入するまでに少し時間がかかり、現状の「倫理」「現代社会」の内容をそのままにしておくにしても、当面は「倫理」「現代社会」の教科書執筆、教科書検定には心理学の専門家が参加することが不可欠だと考えられる。

“自己の生き方を考える”　(学習指導要領）ことを主な目標にした教育が、防衛機制などの精神力動的アプローチ、あるいはその他の「反証可能性」を欠く考え方に基づいて青年期の特徴や人間の特徴を説明する教育になっていることが、はたして適切かどうか再考が必要だろう。現在の日本の高校教育での心理学的なものの扱いは、アメリカ心理学会による High School での心理学教育（2005 現在で毎年 370,000 人の生徒が心理学の授業をとっている）のスタンダードが、科学的なエビデンスに基づいた心理学の内容と科学的思考を教育目標としているのとは、まったく対照的だといえる。今後、日本の高校生に興味の持てる内容を盛り込みながら真の人間理解・自己理解を達成させるためには、積極的にエビデンスに基づいた科学的な心の教育の内容構成をするという選択肢を考えなければならないだろう。

内容

1）日本学術会議「日本の展望」から
2）高等学校教育の中の心理学：科目「倫理」「現代社会」
3）科目「倫理」の中の心理学
4）科目「現代社会」の中の心理学
5）アメリカのHigh Schoolでの心理学教育
6）高等学校教育に心理学を導入するために考えられる選択肢

1）日本学術会議「日本の展望」から

日本学術会議「日本の展望」（心理学）「心理学からの提言」（2009）中、「社会からの要請」の「初等・中等教育における心理学的なものの考え方の導入」の項では、初等・中等教育において、「体についての科学的な理解と同様に、**心についても科学的な理解が必須**である。したがって、初等・中等教育においても**心理学的なものの考え方の導入をすべき**だろう」との提言（案）がある。

2）高等学校教育の中の心理学：科目「倫理」「現代社会」

心理学は、すでに日本の高等学校教育に深くかかわっている。科目「現代社会」や「倫理」の教科書では、実質的に心理学的内容あるいは密接に関連する内容が扱われている。

「学校教育法施行細則」で「各教科に属する科目」が定められ、「高等学校指導要領」で「教科」の「科目」の内容の大枠が定められているが、そこには心理学が関わるものが少なくない。

注：「主として専門学科において開設される各教科・科目」にも心理学が関わると考えられるもののがみうけられる。
「家庭」（たとえば、“子どもの発達と保育”、“消費生活”）、
「看護」（たとえば、“精神看護”、“母性看護”）、
「情報」（たとえば、“情報と問題解決”）、
「福祉」（“こころとからだの理解”）

ここでは、「倫理」と「現代社会」の教科書の中で、心理学的なものがどのように扱われているかの現状、そこにある問題点、さらに将来、心理学が高等学校教育にどう関わっていったらよいかを考えていくことにしたい。

今回検討した教科書は、以下のものである。

『倫理』
○東京書籍　（2009 年 2 月発行 2007 年 3 月検定済）
○数研出版　（2009 年 1 月発行 2006 年 3 月検定済）
○実教出版　（2009 年 3 月発行 2002 年 3 月検定済）
○山川出版社（2009 年 1 月発行 2002 年 3 月検定済）
『現代社会』
○東京書籍（2009 年 2 月発行 2006 年 3 月検定済）
○数研出版（2009 年 1 月発行 2006 年 3 月検定済）
○教育出版（2009 年 1 月発行 2006 年 3 月検定済）

3）科目「倫理」の中の心理学

（1）学習指導要領にある「倫理」の内容

学習指導要領では、各科目の「内容」が規定されている。「倫理」では、内容の項目は、次の通りになっている。

（1）現代に生きる自己の課題
“自らの体験や悩みを振り返ることを通して、青年期の意義と課題を理解させ、豊かな自己形成に向けて、他者と共に生きる自己の生き方について考えさせるとともに、自己の生き方が現代の倫理的課題と結び付いていることをとらえさせる。”
（2）人間としての在り方生き方
ア　人間としての自覚
イ　国際社会に生きる日本人としての自覚
（3）現代と倫理
ア　現代に生きる人間の倫理
イ　現代の諸課題と倫理

（2）教科書『倫理』の中の心理学：具体例

それぞれの教科書で心理学がかかわる内容には、次のようなものがみられる。

●数研出版　改訂版　高等学校『倫理』　（2009 年 1 月発行 2006 年 3 月検定済）

第 1 編　青年期の課題と人間としてのあり方生き方
第一章　青年期の課題と自己形成
1　人間とは何か（人間の不可思議さ／さまざまな人間観）

2　青年期の意義と課題（現代社会における青年期の意義と課題／ライフサイクルにおける青年期）

3　自己形成と自己の生き方（自我の発見と形成：自我のめざめ、友情と恋愛、欲求と防衛機制／パーソナリティの形成：個性と価値観、アイデンティティの確立）

第２編　現代と倫理

第２章　現代に生きる人間の倫理

4　現代の思想の流れ（理性的人間像への反省：意識の底にあるもの（フロイト、ユング）

第３章　現代の諸課題と倫理

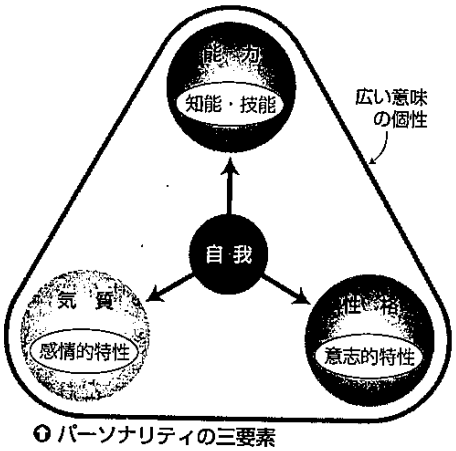
2　家族・地域社会と情報化社会（情報化社会の功罪：情報化社会の問題点）

3　異文化の理解と人類の福祉（異文化の理解：自民族中心主義の克服；人類の福祉：差別の構造と偏見の心理　）

（1）数研出版の教科書『倫理』の中での心理学的なものの扱いの特徴は、フロイトを引用しての防衛機制、エリクソンの考えに基づくアイデンティティの確立、フロイトとユングの紹介など、精神分析学派への偏重があることであり、反証可能性のあるエビデンスを持った心理学的概念や事実の記載がないことである。

（2）そのほかにも問題な点がみられる。例をあげる。

①たとえば、パーソナリティの理解の項で、ｐ 15 の「パーソナリティの三要素」と題するモデル図である。これは、「自我」が「気質（感情的特性）」と「性格（意志的特性）」、能力（知能・技能）の三要素の中心にあって、矢印がそれぞれに向かい、それらをコントロールしているように描かれている。このような理解をパーソナリティの最も典型的な理解として示すのは、心理学の常識ではありえないだろう。



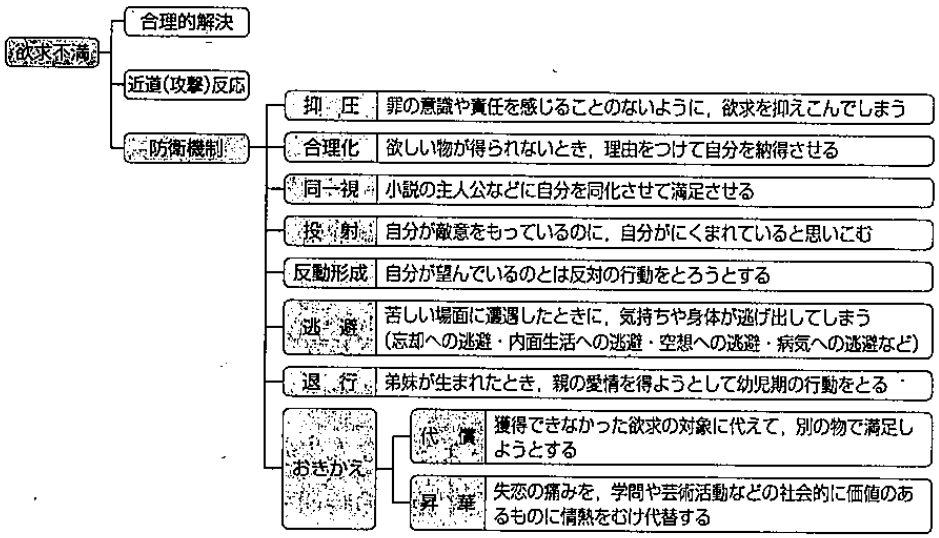
❶ パーソナリティの三要素

＜数研出版　改訂版　高等学校『倫理』（2009; ｐ 15）＞

②また、防衛機制を「欲求不満に対して無意識に自己の精神的安定をはかろうとする防衛機制」と定義した上での分類図である（p 14）。「欲求不満に対して」という限られた機能に防衛機制を位置づけるのは、不快な欲動、不快な情動からの保護を防衛の機能とするフロイトの考えを表現する定義として典型的だとはいえない。東京書籍の『倫理』（p17）では、類似した表現がされており、ここでは防衛機制は「欲求不満や葛藤に直面したとき、自分の心がそこなわれることを無意識に防ぎ守ろうとする適応のしかた」と定義して、「欲求不満の解消」と題するほぼ同じ図が描かれている。

実教出版の『倫理』でも、同様な図が描かれ、“欲求不満から生じる不安・焦燥・劣等感などの苦痛をさけるために、防衛機制とよばれる無意識の心のしくみがはたらくことがある”と書かれている。

❶ 防衛機制とその例　オーストリアの精神分析学者**フロイト**は，人が欲求不満におちいったとき，無意識に自分を守るための心のしくみを防衛機制とよんだ。



＜数研出版　改訂版　高等学校『倫理』（2009; p 14）＞

③たとえば、情報化社会の功罪（p192）では、“さらに、ヴァーチャル=リアリティ（仮想現実）と現実を混同して反社会的行動に走る例も見られる”と記述して、影響調査データというエビデンスを示さずに、「例」とは書きながらも、読み手には＜ヴァーチャル=リアリティ⇒現実と混同して反社会的行動＞という、単純なステレオタイプを形成させるミスリーディングな記述手法がとられている。

これは、他の教科書も同様である。

実教出版『倫理』（p 191）では、“わたしたちの日常生活が情報を通じた間接的な経験（擬似環境）に依存するようになると、知らないうちに現実と仮想現実（バーチャルリアリテ

ィー）との区別があいまいになり、意識と現実との間でゆがみが生じる危険が生まれてくる”と書かれている。山川出版社『倫理』（p182）では、“テレビの娯楽番組は刺激の強い殺人事件などを好んで取り上げ、大衆誌は有名人の不倫やスキャンダルを報道する。そこにバーチャル・リアイティの心理的支配、つまり仮想と現実をなんとなく同一視する傾向が社会に広がってくるのである。少年犯罪の過激化は、そういう社会的集団心理が一部の突出した反応を生み出したと考えられる。”としている。

④文化人類学の問題ではあるが、「青年期の意義と課題」（p9）には、次のような記述がみられる。

“アメリカの文化人類学者マーガレット=ミードによると、南太平洋のサモア諸島における思春期の少女たちには、不適応行動・反抗・神経症など、いわゆる青年期特有の現象は認められなかったという”

同様な記述は、数研出版『現代社会』（p 55）「青年期への注目」にもある。

”アメリカの文化人類学者であるマーガレット=ミードは、サモア諸島の少女たちの成長過程を調査し、子どもから大人への移行が、アメリカの少女たちに見られる精神的・感情的な悩みや不安・葛藤などがなく、連続的にスムーズに行われていると報告した。ミードによれば、無文字文化に住んでいるサモアの少女たちには、モラトリアムとしての青年期は存在しない。つまり、児童期や青年期が存在するかどうかは、発達の問題であるよりも社会や文化の問題であるとしている。”

しかし、これは、その後の研究の証拠（下記＜参考＞）を無視して文化相対主義を過度に強調する記述だといえる。誤りをそのままに、何の注釈もつけないままに書くのは教科書として不適切だろう。

＜参考＞

“こうしたさまざまな状況から明らかなのは、ミードの主な結論も、そしてサモアについての彼女のその他の記述の多くも、大きく誤っているということである。

ミードはサモアの思春期をストレスのない時期として描いたが、これは彼女自身のデータとも矛盾する。彼女自身の記しているところでは、調査した二十五人の思春期の女性のうち四人が非行を犯していた。“（p 27）

（『ヒューマン・ユニヴァーサルズ』ドナルド・E・ブラウン（鈴木光太郎訳）新曜社　2002.）

○**東京書籍　『倫理』**（2009 年 2 月発行 2007 年 3 月検定済）

第 1 章　青年期の課題と自己形成
　1.　青年期の意義（1.人間とは何か；人間についての定義、2.青年期の位置づけ；子どもから大人への移行期、大人になるための猶予期間、 3.青年期の特徴；多様な変化の時期、自我の発見）
　2.　青年期の課題と生き方（1.主体性の確立；アイデンティティの確立、自他の体験から学ぶ、問題へのとりくみ、自己実現の追及、2.自己理解；自己理解のむずかしさ、自己理解の方法）
第 5 章　現代の課題を考える（4.情報社会の中の人間；情報社会とは何か、ステレオタイプの呪縛、・・・、携帯電話につながれる「わたし」、メディア・リテラシーの獲得）

●**実教出版　高校『倫理』**　（2009 年 3 月発行 2002 年 3 月検定済）

第 1 章　青年期の課題と自己形成
　第 1 節　青年期の意義（第二の誕生、マージナル-マン、自立への模索、友情と恋愛、』青年期の出現）
　第 2 節　青年期の課題（さまざまな欲求、適応行動とパーソナリティ、欲求不満と防衛機制、アイデンティティの模索、現代青年の課題）
第 2 章　現代に生きる人間の倫理
　第 5 節　人間への新たな問い（1.理性の深層への反省；無意識の世界-フロイト、集合的無意識-ユング、・・・）
第 3 章　現代の諸課題と倫理
　第 4 節　高度情報化社会の課題（・・・、情報化時代を生きる、・・・）

●**山川出版社　東学版『倫理』**（2009 年 1 月発行 2002 年 3 月検定済）

第 1 編　青年期の課題と人間としての生き方
　第 1 章　現代青年の自己形成の課題
　　第 1 節　青年期の意義と課題
　　1.青年期とは（青年期のはじまり、青年期の成立と延長）
　　2.　自己の発見と青年期の悩み（自分との出会い、青年期の悩みと不安、性格の自覚と個性、）
　　3.人間関係の広がりと自己形成（他者との出会い、愛と性の問題、アイデンティティの確立、自立への旅）
第 2 編　現代と倫理

第２章　現代に生きる人間の倫理

第６節　現代思想の流れ

3.自己実現の心理学（精神分析学のはじまり、無意識の発見、快楽原則と死の本能、創造性の根源としての無意識、文化の多様性を超えて）

第３章　現代の諸課題と倫理

第２節－A　家族と地域社会（・・・男性性と女性性、・・）

第２節－B　情報社会（・・・、情報と現実の間の心理、主体性の確立・・・）

４）科目「現代社会」の中の心理学

「現代社会」では、「倫理」とかなり共通した心理学に関連する内容が扱われている。

●東京書籍　『現代社会』（2009 年 2 月発行 2006 年 3 月検定済）

第 2 部　現代の社会と人間
　第 1 章　現代の社会生活と青年
　　2.　現代社会と青年の生き方
　　1　青年であること（青年期と発達、社会的な発達、現代の青年期）
　　＊境界人、第二反抗期、アイデンティティ、モラトリアムなど
　　2　社会とのつながり（環境と適応、欲求不満への対応（防衛機制））
　　＊ここには、A.エリスの理性感情行動療法の”四つの非合理的思考”が唐突に出てくる
　　3.生きがいと進路の創造
　　キャリアの開発、職業を選ぶ、多様な生きがいの追求

●数研出版　改訂版　高等学校　『現代社会』（2009 年 1 月発行 2006 年 3 月検定済）

第 2 章　現代社会における青年の課題
　1　青年期とはどんな時期か
　　子ども？大人？　急速に変化するからだ（モラトリアムなど）　境界に生きる私たち
　2　青年期へのまなざし
　　青年期の誕生　青年期への注目（ミード）
　3　ライフサイクルと自己の形成
　　ライフサイクルとは　青年としての自己実現
　4　欲求の充足と自己実現
　　欲求の不満と充足　自己実現をめざして
　5　豊かな社会に生きる
　　豊かな社会への適応と主体化　豊かな社会への参加と自己実現　社会的適応と自己実現

●教育出版　『新現代社会―地球に生きる』（2009 年 1 月発行 2006 年 3 月検定済）

第 1 編　現代に生きるわたしたちの課題
　第 2 章　日常生活と宗教・芸術
　　3　人間と芸術
　「芸術は美にふれた感動を与える」「芸術は抑圧された感情を解放する」

第２編　わたしたちの生き方

第１章　わたしたちと現代社会

第２節　わたしたちの生き方

1　青年であること、自分らしさを求めて

（境界人とモラトリアム、境界人としての不安定さ、アイデンティティ、他人に映る自分と自分にとっての自分）

2.　人間の切実な欲求

（認められることへの欲求、自己意識、第一次集団とかけがえのなさ、身近さと傷つけやすさ）

5）アメリカの High School での心理学教育

High School 心理学のカリキュラムの全米基準

アメリカ心理学会は、ハイスクールでの心理学教育のために、全国基準（National Standards for High School Psychology Curricula）を作成している（現在、2005 年版）。ハイスクールでは、一年に約 37 万人の生徒が心理学を履修している（American Psychological Association のウェブサイトにある”High School Psychology”のページ参照）。このページでは、教育用スライドなどの数多くのリソースも公開されている。

心理学教育が目指すもの

心理学教育が目指すものについては、以下のように書かれている。

Through the study of scientific psychology, students gain an understanding of the complexities of human thought and behavior, as well as the factors related to the differences between people. Students also gain a basic understanding of the scientific methods that are at the core of the discipline. Students are able to directly apply knowledge gained from a psychology class to their daily lives.

その次のパラグラフでは、”Psychology is a science with connections to social and natural sciences.”と書かれており、あくまでも心理学は科学であることが強調されている。

カリキュラムの構成

基準となる心理学教育のカリキュラム構成は、具体的には次のようになっている。

I. Methods Domain

A. Introduction and Research Methods

II. Biopsychological Domain

A. Biological Bases of Behavior

B. Sensation and Perception

C. Motivation and Emotion

D. Stress, Coping and Health

III. Developmental Domain

A. Lifespan Development

B. Personality and Assessment

IV. Cognitive Domain

A. Learning

B. Memory

C. Thinking and Language

D. States of Consciousness

E. Individual Differences

V. Variations in Individual and Group Behavior Domain

A. Psychological Disorders

B. Treatment of Psychological Disorders

C. Social and Cultural Dimensions of Behavior

6）高等学校教育に心理学を導入するために考えられる選択肢

（1）　“科目”としての「心理学」の導入

教科「公民」の中に、「現代社会」「倫理」のような科目とならんで、独立した科目「心理学」を導入することが一つの道として考えられる。この選択肢は、「学校教育法施行細則」や指導要領の大幅な改訂を必要とするため、短期的な実現は難しいと考えられる。しかし、中長期的には、この方向を考えることも不可能ではないと思われる。この場合、導入されるべき内容は、日本の国情を考慮しながらも、たとえば、アメリカ心理学会の全米基準などが参考になるだろう。

（2）　科目「倫理」「現代社会」の中への「心理学」の部分的導入

現在、「倫理」「現代社会」の中で扱われている心理学的な内容を充実あるいは修正して、科学的に高校生に自己を見つめ直すようにはかることである。これは、教育基本法細則を改訂しなくても可能だと考えられる。指導要領にある「内容」は現行のものでも不可能ではないかもしれないが、望ましくは、その一部を改訂する方向が考えられる。